

## 「より深く包括的な諸宗教の協働に向けて」

庭野平和賞のためのスピーチ

ディーナ・メリアム

「女性による世界平和イニシアティブ」創設者

このたび庭野平和財団が与えてくださった大きな荣誉に対し、また貴財団が、私たちの組織の中心として、女性の精神的指導者たちが進めている世界平和のための活動を評価してくださったことに対し、感謝の意を表します。諸宗教間の協働は、私たちの時代のもっとも大切な人類の営みの一つです。しかし、その重要性は、世界の人々に十分に認識されていません。庭野平和財団は、より良い世界の創造に向けて、諸宗教間の協働が果たす役割の大きさを理解している数少ない組織の一つとして、長年にわたり注目されてきました。

諸宗教間の活動に携わったこれまでの17年近い年月を通して、私が得た体験や所見の一端を皆さまと分かち合いたいと思います。さらに今日、諸宗教が協働する上でもっとも緊急の課題と思われる点について所見を述べたいと思います。

私は成人してからの年月のほとんどを諸宗教間の協働に向けてきましたが、長年それは学術面からのものが主でした。ニューヨークのコロンビア大学の大学院生として世界の主要宗教の偉大な指導者や神秘主義者の研究に没頭する中で、彼らの体験と思い描いていたビジョンが思いもよらぬ一致をしていること、しかしその一方で、多くの場合そうした体験とビジョンは、多様な文化や時代に即しながら、さまざまな比喻や物語の中に被い隠されてきたことを知りました。二十歳のころ精神を探究する道に入った私は、ヒンドゥー教の道に引き寄せられました。わが師パラマハンサ・ヨガナンダが世界の宗教伝統は根底では一つと語っていたことがその理由です。その後の私の研究は、師から学んだことや、直感的に感じたことの正しさを立証してくれました。

それからおよそ20年の間、私は諸宗教間の活動に職業として関わることはありませんでした。私が活動に関わるようになったのは、国連のコフィ・アナン事務総長が、ニューヨークの国連本部を会場にして、西暦2000年に宗教指導者による「ミレニアム世界平和サミット」を開催することに合意した時からでした。サミットの目的は、諸宗教が国連と連携して主要な国際紛争の解決のためにどのような活動が可能か探究することでした。国連総会の場に主要な宗教が招かれて会議を開催するのは初めてのことで、私は副議長としてイベントの開催を支援するよう要請されました。このプロセスを経験したことは、私のその後の活動の道筋を決める手助けとなりました。

国連がサミットの会場となっていたため、私たちの活動はそれぞれの宗教教団のトップレベルとで行なわれました。その経験は私にとって本当の出発点となりました。長年瞑想を実践していた私は、宗教の持つ体験的かつ神秘的な側面の方に強い関心を持っていました。しかし、教団組織においても、深い智慧を持つ人々や社会のために献身する人々が存在することをすぐに知ることになり、そしてそのことに私は心を惹かれました。

サミットを組織準備する過程で、いくつか関心を引かれる出来事がありました。当時、事務総長の事務局が国連の諸機関による諮問委員会を作っていたため、私たちは諮問委員会に進捗状況を報告し、常に最新情報を提供していました。諮問機関にいたある女性は、女性の宗教指導者によるサミットへの参加に特に強い関心を寄せていました。その時、私は特に問題を感じることもなく、女性の参加者を探し始めました。

イギリスのオックスフォードで宗教指導者のグループと一緒に食事をする機会があり、隣り合わせた男性の宗教者に、国連のサミットに参加してもらう女性の宗教指導者を探すのに苦労していると話しかけたときのことです。私は単なる食事中の会話のつもりでしたが、その男性宗教者は私の言葉に強く反発し、厳しい口調で私に「なぜ女性の宗教指導者が必要なのか」と尋ねてきました。私の驚いた顔を見て、さらに言いました。「私の助言を受け入れて、もうその問題に触れないことだ。さもないと誰もそのサミットに参加しないことになるかもしれない」と。それは1999年のことでした。その後世界は大きく変わりましたが、地域によっては今日でも同様な反応が返ってくるかもしれません。

女性の宗教指導者を探すのに苦労し、そのためイギリスの動物行動学者のジェーン・グドール（1934-）氏のような女性の著名人を見つけることで補いました。こうした解決策には満足できませんでしたが、私はまだ学習段階にいました。サミットの準備期間の多くは、国連にダライ・ラマを招聘することはできないという現実に対し、ダライ・ラマ殿下が招待されなければサミットに参加しないことを表明する著名な宗教者への対応に追われるなど、政治的課題への対応に費やされました。そうした政治的交渉の傍らで、ジェンダーの問題は忘れ去られていきました。

サミット開催の当日、総会の会場での祈りを前に宗教指導者が入場を待っているとき、新たなジェンダー問題が発生しました。ある高僧による祈りが予定されている時でしたが、その高僧の教団では女性と間近に接触することが許されていませんでした。そのとき、十数人のタイの仏教僧侶の代表団のなかに唯一の女性僧侶がいて、高僧が入場する入り口付近に座っていたのです。彼女に場所を移動してもらうように言われ、私とその理由を尋ねると「女性だから」という返事が返ってきました。大勢のスタッフが彼女に移動してもらおうとしましたが、英語がわからず、しかも代表団の僧侶たちと引き離されるのを拒んでいました。時間が経って開幕時間になってしまい、私は彼女を移動させて欲しいと頼まれました。私にとってそれはつらい瞬間でした。ところが、彼女

のところへ歩み寄って手を取ると、彼女は笑みを浮かべ、私についてきてくれたのです。こうして問題は回避されたものの、その時の思いは私の心に強く残りました。そのあとでタイの代表団が挨拶に来られたとき私は彼女に謝罪し、以来、私たちは親友になりました。GPIW 創設の際には、彼女は共同議長の一人でした。

サミットは女性宗教指導者にとっては不満の残るものであり、彼女たちは女性宗教指導者だけを対象にしたフォローアップのためのサミット開催を求めました。事務総長の事務局に戻って要望を伝えたところ、事務総長はそれに同意し、ジュネーブのパレ・デ・ナシオンで二回目のサミットを開催してはどうかと提案されました。そこで、私はジュネーブの宗教関係者と一緒に準備を始めました。しかし当初の反応は、「あなたがたのようなアメリカ的なフェミニズムはここでは要らない。ここには女性の宗教指導者はいない」というものでした。私は虚をつかれた思いがしました。というのは、こうした活動をフェミニズムの問題としてとらえたことがなかったからです。なぜこの問題がこんなに多くの人々にとって脅威となるのか興味を持ちました。女性宗教指導者の問題を回避するために、イベントのタイトルを「女性の宗教および精神的指導者による世界平和のイニシアティブ」から「宗教界における女性の役割」へと変更してはどうかとジュネーブの宗教関係者たちから提案されましたが、私はその提案を拒否しました。そのときから、構想の実現に向け困難な道のりが始まりました。

2002年、宗教界を中心に、経済界や政府のリーダーと合わせて75カ国以上の国々から、750名の女性指導者にパレ・デ・ナシオンに集まってもらうことができました。2000年のサミットでは政治的な問題や競合が多々発生しましたが、ジュネーブのサミットではそうした問題はありませんでした。この集まりから組織を作ろうという考えはありませんでしたが、紛争地域に行って和平に向けた対話を行なう手助けをして欲しいといった依頼を間もなく受けるようになり、それが「女性の宗教および精神的指導者による世界平和のイニシアティブ」誕生のきっかけとなりました。後に名称を短くして「女性による世界平和イニシアティブ」（GPIW）としました。

最初の5年間は、イスラエル・パレスチナ、イラク、スーダン、アフガニスタン、カンボジアなどの紛争地域や紛争終結地域における対話や、インドとパキスタンとの間の対話の準備に使いました。対話の最初の相手は女性で、次に青年リーダーたち、そして最後にはすべての人が入り混じっての対話となりました。こうした対話で特徴的だったのは、常に東西のバランスがとれた多様なグループの女性宗教指導者によって形成されリードされていたことです。仏教の尼僧とヒンドゥー教の女性教師に、スーダンやイラクやその他の紛争地域の人々に会ってもらいました。こうした経験は非常に大きなプラスのインパクトとなり、参加者はより広い世界の現実に目を開き、異文化の中で女性が果たすことのできる役割を知ることができました。

ここでジェンダーの問題以外の二つ目のテーマについてお話しします。それはGPIWの活動の動機となったものであり、ジェンダーのバランスだけでなく、東西のバ

ランスのためにも必要なものです。諸宗教間の協働はこれまで主にアブラハムの宗教（啓示宗教）の伝統の中で形成され、その短い活動の歴史のほとんどはアブラハムの宗教伝統内の対話に限られていました。昔から今に至るまで、アブラハムの宗教の世界に深刻な緊張が存在してきたことで宗教間対話が必要とされ、その論理的根拠となってきましたが、しかしそのために、これまで世界の半分は諸宗教間対話から除外されてきたのです。

「ミレニアム世界平和サミット」の期間中、西洋の多くの組織の中には、東洋の伝統と深く関わることに抵抗を感じるものが多いことを知りました。2001年のアメリカの同時多発テロのあと、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世がイタリアのアッシジで「世界平和祈りの集い」を主催したとき、「法（ダルマ）」に依る東洋の宗教が、おそらく故意ではないにしろ再び軽視されるのを目撃しました。私は、参加した宗教がそれぞれ別々の部屋で祈りを捧げるように言われたことを記憶しています。その際カトリック教徒には自分たちの部屋があり、ユダヤ教やイスラームの参加者にも同じく個別の部屋がありましたが、東洋から参加した「法」に依る宗教のほとんどは一括りにされ、神道、ヒンドゥー教、シーク教、ジャイナ教などの代表は同じ一つの部屋で祈ることになりました。世界の宗教が一緒に祈ることが許容されなかったばかりか、東洋の「法」の宗教には、個別の部屋の提供という礼儀が尽くされることもなかったのです。それは、私には諸宗教間に存在する大きな不平等のしるしに思えました。こうした意識の欠如は、いまだに多くの諸宗教の集まりで多く見られますが、誰もそのことに気づきませんでした。いまだに宗教の優劣にこだわり、他よりも自分の方が正当だと思っている人たちがいる中で、意義ある諸宗教間対話など可能でしょうか。それは諸宗教間の協働の前提に完全に反するものであり、過去から現在に至るまで数多くの宗教間の緊張の原因になってきました。ヒンドゥー教徒や仏教徒など東洋の宗教からもアブラハムの宗教と同じ数の人々が対話に参加するだけでなく、彼らが他の宗教者と同じように対話を築き上げ、平等な立場で対話のテーブルにつくことができるまで、宗教間の調和は実現しません。

しるし程度の代表を置くだけでは、もはや不十分です。真のバランスを実現するための努力が不可欠なのです。これは重要な点です。男女間のバランスや東西のバランスは、礼節や政治的な公正さを示すことが目的ではなく、また少数派のグループを包容したり彼らに配慮することでもありません。それは「法」の宗教の伝統や女性から与えられるものを、世界が真に必要としてるからこそ重要なのです。「法」の宗教の伝統に関して言えば、私たちの世界が直面する複合的な危機の解決に有用であるにもかかわらず、その英知のすべてがこれまで無視され続けてきました。そうした状況はいま変化を遂げつつあります。しかしその変化がもっとも急速に進んでいるのは、伝統的な諸宗教ネットワークの外側なのです。

GPIWは東西のバランスを達成することを活動の主要目的の一つに決め、2009年には「東洋の英知により大きな世界の声を与えよう」というテーマのもと、カンボジア

でサミットを開催しました。ヒンドゥー教と仏教の指導者が世界中から集い、この二つの偉大な「法」の伝統が持つ共通基盤について話し合いました。仏教とヒンドゥー教がともに備えている英知とビジョンと実践を再発見することで、アジアの精神的遺産が世界規模で新たな力を持つことになるのです。

この頃、GPIW はアメリカにも注意を向けました。それまで、私たちの活動の大半は世界の紛争地域や紛争終結地域でのものでした。しかし、アメリカ社会は過去も現在も多く緊張を抱え、変化を経験しています。そのため、アメリカ国内で変化する宗教状況を探り、広がりつつある瞑想の運動に焦点を当てることを決めました。私たちはキリスト教、仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教、イスラーム、ネイティブアメリカンの宗教の中から、瞑想の指導者をコロラド州のアスペンにあるアスペン研究所に案内しました。その目的は、瞑想の実践の広がりがアメリカ社会にどのような影響を与え、アメリカの宗教の動きを変化させているかを探ることでした。仏教は、今日アメリカ国内でもっとも急速に拡大している宗教です。「縁起」や「正念」(マインドフルネス)などの仏教の教義の多くが社会の主流概念になり、教育や医療制度など主だった社会制度の中に組み込まれつつあります。同時に、現在二千万人のアメリカ人が何らかの形でヨガを行っており、カルマや輪廻などの概念がいま広く受け入れられています。多くのキリスト教の聖職者が仏教の瞑想を行っているだけでなく、指導者でもあります。禅の老師でもあるカトリック神父に出会うことも珍しくありません。コロラド州には初めてのキリスト教と仏教の合同教会があり、信者は両方の宗教を実践しています。ニューヨーク最大の米国聖公会の一つには、「リビング・クライスト・サンガ」あり、そこでは「マインドフルネス瞑想」がキリスト教の日曜礼拝のあとに行なわれています。このことは、アメリカの変化する宗教事情について何を物語っているのでしょうか、さらには二つの信仰を同時に育む人々が増えている中で、結局それは諸宗教の未来について何を語っているのでしょうか。ヨーロッパはアメリカよりも世俗的な社会のため、程度こそ違ってもアメリカと同様のことが起きています。こうした新しいダイナミックな動きを代弁し、GPIW はアメリカとヨーロッパに「コンテンプレイティブ・アライアンス (黙想の連合)」を創設しました。気候変動、環境破壊、経済の不平等などの相関した危機への取り組みに必要な個人や社会の変容を促すために、瞑想の実践がどのような効果をもたらすか探求するのがその目的です。

瞑想の実践が広がることで、諸宗教の結びつきはこれまで以上に密接になりました。宗教に優劣はないと考える人々、すべての宗教には真理に関するそれぞれの特有の見方がある、それぞれがみな正しいと考える人々が増えています。もはやどの宗教が正しいかという問題ではなく、どの宗教が一人ひとりの人間にぴったりと語りかけるかが大切なのです。

数ヶ月前、GPIW は「仏性の目覚め」というテーマで、日本で諸宗教によるリトリート (黙想会) を開催するお手伝いをしました。回を重ねるごとに私たちは東洋的な

表現を含むテーマを選び、他の宗教の参加者に対して、このテーマが皆さんに何を語りかけているか考えてほしいとお願いしています。今回は、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教の宗教指導者による「インターフェイス・アミーゴ」（宗派を超えた友だち）というアメリカのグループを招待しました。「アミーゴ」は「友だち」という意味の一般的なスペイン語です。そのグループは、2001年の同時多発テロのあと、ワシントン州シアトルに住むプロテスタントの牧師が地元のイマーム（イスラームの指導者、礼拝の導師）に連絡をとり、9.11によって起きた緊張を和らげるために一緒に活動を始めようと言ったことから生まれました。彼らは教会やモスクでの講演を始め、ユダヤ教のラビにも参加を呼びかけることにしました。「インターフェイス・アミーゴ」は今ではアメリカでとてもポピュラーな存在になり、国中を旅行しながら諸宗教対話について講演をしています。「仏性の目覚め」というテーマに彼らがどう反応するかわかりませんでした。とても気に入ってくれたのでほっとしました。宗教間の友情が彼らの通常の話題ですが、今回のテーマは、精神的なトピックについて深く掘り下げていて斬新だと話してくれました。リトリートの会場で、彼らは立ち上がって次のように話し始めました。

最初にキリスト教の牧師が「ここに良いニュースがあります」と話し始めました。良いニュースって何だろうと待っていると、彼は「イエス・キリストは唯一の救世主ではありません」と言いました。イスラームのイマームが次に言いました。「私にも良いニュースがあります。ムハンマドは最後の預言者ではありません」。そしてユダヤ教のラビも加わって言いました。「私にも良いニュースがあります。ユダヤ人は選ばれた民ではありません」。その場のみんなが笑いました。このことがお分かりにならない方のために付け加えると、これら三つの信条、つまりイエスは唯一の救世主である、ムハンマドは最後の預言者である、ユダヤ人は選ばれた民であるという信条が、アブラハムの宗教同士を対立させ、世界の他の人々の反目を招いているのです。インターフェイス・アミーゴは、いま各地を回り、こうした信条の否認をユーモアと愛情あふれる方法で行ない、それが宗教間の一致を生み出す助けとなっています。彼らの目標は、いずれかの宗教を傷つけることではなく、宗教間の障壁をなくすことなのです。こうした導入を行なったあとで、牧師とイマームとラビは、「仏性」について、それぞれの伝統の言語ではどう解釈するか省察を行ないました。

「コンテンプレイティブ・アライアンス」は、危機的問題についてアメリカの各地で対話を行なっています。私たちの行く所はどこでも、たとえ小さな市や町であっても、仏教センターやヒンドゥー教徒のグループがあり、スーフィー教徒などさまざまな宗教の信者が住んでいます。アメリカでは新たな宗教の混在が出現しつつあり、それは未来にとって良い兆候です。なぜならそれは人々が宗教間の障壁を乗り越え、自分自身の精神的な成長を可能にする実践法を見つけるのに役立つからです。特定の教義よりも精神的な成長が重視されるようになってきたことは、社会の発展にも寄与するでしょ

う。諸宗教のリーダーとしての私たちの活動は、次の段階の宗教間の協働とはどういうものかこの目で見て理解し、この新しいダイナミックなエネルギーを私たちが直面する危機的課題への取り組みに向けて活用していくことです。現在アメリカや世界の国々で起きているスピリチュアルな転換には、経済格差から自然界とのつながりに至るまで、多くの問題に対する人間の認識を変化させる可能性が秘められています。なぜなら、これらの変化は人々の意識の変化にかかっているからです。

数年前、私たちは対話を目的に、アフガニスタンの人々のグループを案内してインドに行きました。インドのダラムサラがたいへん靈感に富んだ環境であることがわかったため、そこにグループを案内しました。いつものように、対話の指導を目的に東西の宗教伝統から男女の宗教指導者も一緒でした。紛争や平和構築の方法に関する数多くのテーマをカバーしました。数日後、私は参加者の一人から「瞑想はいつ学べるのか」と訊かれました。私たちは改宗を勧めたりせず、そのためのスピリチュアルな実践の紹介もしないため、その質問は驚きでした。共に祈り、静かに座ることはありますが、特別なテクニックを教えることはありません。参加者にそれがみなさんの希望ですかと尋ねると、「それがインドに来た理由です。私たちは、いつ、どこで次の爆発が起こるかもわからないまま、恐怖の状態の中で生きています。恐怖心にどう対処するか学ぶ必要があるのです」という答えが返ってきました。その場にいたアフガニスタンのイマームの方に振り向くと、彼もうなずきました。そこで、私たちのグループの指導者の一人が、ストレス軽減のための基本的な瞑想のレッスンを行ないました。このときは強い要望があったためですが、こうした瞑想を行なったのはこの時だけでした。このセッションの間に、たとえ宗教伝統は違っても、多くの紛争地域の人々が、恐怖心や怒りを軽減するスピリチュアルな手法を求めていることを知りました。今日、教義よりも重要なのは、人々が人生の難局に立ち向かう手助けとなる実践です。

経済の不安定な先行きや、自然界への影響、社会の対立や二極化に起因する不安など、世界は不透明感や不安感に満ちています。人々がこの不安に対処するために、私たちにはどのような手助けができるのでしょうか。一つの方法は、人々を内なる精神的資質に結びつける実践を、一緒になって行なえる機会を持つことです。

諸宗教間の運動に長い間携わってきた人々や、他の伝統に触れ親しんできた人々の数が増えています。真理は一つであり、その真理は多くの言葉で語られることを知っている彼らは、深い一致の場からものを見極めて活動する人々です。生物の多様性のように、宗教の多様性は大切にすべき賜物です。ただ一つの道が唯一の本物であると思いを示してはいけません。こうした人間の理解力の進化は、私たちの平和共存能力に深く関与しています。人類の歴史のなかでは、一つの宗教や文化の他への押しつけが多々ありました。平和な世界を創造するために、私たちの社会はこうした本能から脱却しなければなりません。

ここで少しジェンダーの問題に戻りたいと思います。なぜなら、いま私たちは

ジェンダーによる偏見も乗り越えて進化することを求められているからです。当初、GPIWの活動は女性宗教指導者に発言の場を提供することでしたが、時とともにそれは変化しました。2008年、私たちは「神の女性的側面」というテーマで、インドで大規模なサミットを主催しました。究極の实在に関してバランスのとれた理解をすることが目的でした。この問題にアプローチする一つの方法は、神すなわち究極の实在はジェンダーを超えた存在だと見ることですが、もう一つの方法は、男女両性の特質を合わせ持つものとして捉えることです。アブラハムの宗教伝統は神の女性的側面を見失っていますが、実はこうした理解はアブラハムの伝統の中に隠れて存在しているのです。東洋では女性的側面が失われたことはなく、インド神話に登場するターラーや、ヒンドゥー教の女神ドゥルガーなど、神の女性としての顕現を実感するための実践もあります。ある東洋の伝統においては、個人や集団の変容を可能にするのは神のこうした女性的側面であるとされ、私たちはみな、変容を強く願っているとされています。2008年以降の私たちの活動は、女性宗教指導者の活動を目に見えるものにするよりも、むしろ女性神のイメージを喚起することに重点を置くようになりました。それは女性宗教指導者がこれまで以上に社会に受け入れられるようになったこと、つまり私たちの活動が前進したという事実があったからです。次にすべきことは原初の創造する力（すべてのものの究極の根源）に関する私たちの理解にジェンダー・バランスを取り込むことでした。この創造の力が「父なる神」という男性形だけで理解される限り、ジェンダーによる偏見の理論的根拠としてこの力が使われることとなります。宗教図像学は、私たちの社会がどう機能するかについて深い含蓄を示しています。

神の女性表現に内在する変化をもたらす力について、世界各地を講演しながら旅行しているうちに、アブラハムの宗教伝統の中に、このメッセージに共感して、今ではそれぞれの伝統の中にある同様の側面を深く掘り下げようになった人々にたくさん出会いました。ジェンダー・バランスの問題には内的、外的の両面、つまり社会的、精神的次元があります。活動を続ける中で、女性神のエネルギーとその変化をもたらす力の概念について、多くの男性が女性と同じくらい深く、時にはそれ以上に理解していることを知りました。

今日、海洋や森林や河川など、地球の生命環境は多くの面で危機の状態にあります。動物や植物の多様性が減少し、気候は不安定となり、干ばつや洪水の頻度が増加しています。資源は急速に枯渇しつつあります。将来の水不足が懸念され、先祖より受け継がれてきた天然の種子も失われつつあります。こうした危機から学ぶべきことは、地球や自然の力とより調和して生きる道を見出すこと、すなわち私たちが生命の拠り所としている力に対し、より深い尊敬や感謝と愛情を持って生きること以外にありません。ものごとの見方を変えることが、強く必要とされているのです。

もう一つの危機が同時に生まれつつあります。経済的不平等は極めて危険な段階に達しようとしており、何らかの変化を必要としています。慈善行為を増やすことが



その答えではなく、私たちの生き方や働き方を根本的に変えること、すなわち分かち合いと思いやりの社会、財産の蓄積ではなくウェルビーイング(幸福)を目指す社会への方向転換です。

答えは明確ではありません。問題はとても複雑で絡み合っています。しかし、私たちには一つだけ分かっていることがあります。それは、精神的な原理が危機にあること、そして解決策は私たちが精神的に成長し向上する能力に応じて見出されるであろうということです。この地球上に新たな生き方を思い描き実現するには、人間としての創意工夫と創造力を総動員する必要があります。そのときに同じく必要とされるのは、男性と女性の才能と努力であり、東洋と西洋の知識と智慧です。

いま諸宗教間の協働の範囲は広がりつつあります。世界の各地には、まだ自分たち宗教以外にほとんど触れたことのない人々がいます。そういう人々が尊敬を得て、暴力のない共生社会を作る能力を持つためには、「他者」を学び「他者」を少し体験するだけで十分です。こうした初歩的段階を経て、彼らは次の段階への進んで行くことができるのです。次の段階では、宗教は本当の意味で交流を始め、すべての伝統の中に美と真理を見ることができるようになります。私が1990年代に初めて諸宗教間の活動を始めたときのキーワードは「寛容」でした。私たちは「寛容」から「尊敬」へ、そして「相互の尊敬」と「相互理解」へと進んできました。さらに深く進みたいと願った私たちのために登場した言葉は「ワンネス」と「ユニティー」すなわち「多様な表現を持つ一つの真理」でした。長年にわたって諸宗教間の協働の旅路を歩んできた人々にとって、一致の場だけが活動の拠点です。この社会を変え、地球社会が直面する問題に取り組むために、どうすればこれまで蓄積されてきた精神的叡智と実践を活用できるか、そこに焦点を据えなければなりません。

数多くの人々による諸宗教間の献身的な活動によって、宗教間に新たな親密さと連帯感、すなわち共に座って瞑想し一体となる真の能力が生まれました。しかし、私たちにはさらなる前進が必要です。私たちの地球や生命共同体には、いま多くの問題があります。「一致」の力で人間の悟性に真の変容をもたらし、これまでの価値観をリセットし、精神的な成長や進化に対して、物質的な進歩と少なくとも同等の価値を与えることは可能でしょうか。前進する智慧を与えてくれるのは、精神的な成長です。私たちは、巨大な問題に直面しています。しかし、私たちが一致団結して努力をすれば、対処不可能な問題はないのです。